芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県舞踊特集号　NO.8　46.9

発行所・大分市大手町　県教育庁文化室内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　　編集人・田村卓夫

芸振会議の果たす役割

河野　彰

私は地方文化などということばはあまり好きではない。中央に対比する地方ということは裏返せば一種の劣等感でしかないように思う。現代の情報化社会では良い意味のローカリティも段々と失われて来ている傾向にあるし、それ程はっきりした地域的特色は望めない以上、地方の文化レベルの中央に対する落差として受けとる表現としか考えられないからだ。かって作家中村地平氏(元宮崎県立図書館長、故人）が地方に作家が育ち難いことについて、地方の小都市ではいささかでも文筆活動をするようになると、そこではいわゆる有名人扱いを受ける。そのために逆にその活動がかえて制約を受けることになる。そんな意味のことを何かに書いていたのを読んだ記憶があるが、地方在住作家の一面の悩みであろう。東京などの大都市では問題にならないことも狭い土地ではそうもいかない場合もあり得る。ことに文学作品の場合は地域会社からの制約が知らず知らずのうちに自分をしばる結果になることもあると思う。創作の中の事実と虚構の間の目に見えない配慮がそのイメージをいつの間にかしぼませてしまうことも少くなかろう。

文学ほどではないにしても、こうした悩みは絵画、彫刻、音楽、詩、その他の部門でも多かれ少なかれ地方作家の宿命とでも言えそうで、意欲はあっても力一杯の活動ができずにもどかしく思うのが実状ではなかろうか。もちろんそうは言っても根本的には作家の心構えの問題ということにはなるが、お互に十分活動できるふんい気を作るように心がけたいものだ。

芸振会議の果たす役割はこんなところにもあるわけだが、そういったオフィシアルな運動だけでなく、あらゆる機会を捉えて違った部門の人々との連絡を密にしたいものだ。つまり自分だけの殻に閉ぢ込もり勝ちになるのを避け色々と違った部門の人たちとの私的交流を密にしたいものだ。中央から遠い大分ではそう度々優れた芸術作品に接することもない不利を、こうして何とか補って行きたく思う。

（県芸振会議副会長）

会員獲得が課題の県日舞連

藤間小伊松（こいまつ）

県下の日舞関係者は大分市、別府市という二つの大きな主流のほかに日田、中津、津久見、佐伯、臼杵などの県周辺部にそれぞれわかれています。また日舞教授という仕事は地域社会人の考えや趣味の相異によって古典、新作、民踊といったいろいろな形でその動きや特徴をあらわしています。

以上のようなことから県下を網ら統合するための会員獲得が課題でありながら、相いれるにははなはだ困難な要素を種々持っているため足ぶみ状態になっている有様です。

現在の大分県日舞連盟は戦後間もなく発足した大分市舞踊連盟を数年後に改称して今日に至ったものです。現在は40名余の会員ですが、これらの人々はすべて各流派の名取免許を持っ有資格者ばかりで大分市在住または大分市にけいこ（稽古）場を持っ師匠連中がほとんどです。中には会員自身の名取を多数抱えている親師匠的立場の者や自分自身の趣味だけの者もいます

流派については花柳、若柳、藤間といった三つの会員になっていますが、日本舞踊の心には何ら異ったものはなく各流の特徴はそれぞれありますが、現在では日本舞踊を一般の方々にいかにしたら興味していただけるかということだけです。日本舞

飛しよう（翔）する県洋舞協

平　瀬　克　美

洋舞踊研究所を主宰している者が一つの団体として協会を作ったのが昭和35年12月。当時の会員は故安部峰子、伊坂里美、佐藤朱音、杉原昌子、成田利毅、樋口愁枯、見岳悦子の８名。規約の作成、役員選出、事業計画などが協議された。当時の規約と内容の一部はつぎの通り。

目的・大分県洋舞踊協会は、洋舞踊（バレエ、現代舞踊、その他）の調査研究および舞踊家の技能、教養の向上に関する研究指導を行なうと共に、相互の親睦と福祉を図り、もつて舞踊の高揚と地方文化の発展に寄与すること。

会員・正会員は舞踊を専業とする者にして、規約の会費を納入する者、会費500円。特別会員は本会の事業を後援し、会費2,000円以上納入する者。

役員・会長１名、理事長１名（平瀬克美）理事は大分市、別府市に在住の会員（安部峰子、伊坂里美、佐藤朱音、平瀬克美、成田利毅）

会員の移動・昭和36年、八十野辰美、笠木啓子の２名入会。同38年、福沢賢一入会。成田利毅、見岳悦子、八十野辰美がそれぞれ退会。安部峰子死亡。同39年、笹本公江、永江巌の２名が特別正会員として入会（東京在住）。同40年、湯原恭子入会。同44年、福沢賢一退会。同46年新会員として７名（つぎの会員名表に記載のとおり）入会。46年１月現在の会員、および役員（アイウエオ順）が決まる。

会員（15名）・安　部　あけみ　大分市下白木[redacted]
安　東　光　子　大分市金池南[redacted]
荒　武　久美子　佐伯市山手区[redacted]
笠　木　啓　子　大分市金池南[redacted]
後　藤　智　江　大分市大手町[redacted]
佐　藤　朱　音　大分市上野丘[redacted]
笹　本　公　江　東京都中野区本町[redacted]
杉　原　昌　子　竹田市浦町
高　瀬　多佳子　日田市日隈町[redacted]
永　江　　巌　東京都中野区本町[redacted]
中津留　美　恵　津久見市元町[redacted]
樋　口　愁　枯　日田市南友田町[redacted]
平　瀬　克　美　大分市中島東[redacted]
松　田　美智子　大分市長浜町[redacted]
湯　原　恭　子　別府市西野口町[redacted]

役員・会長／平瀬克美、理事長／笠木啓子、常任理事／平瀬克美、佐藤朱音、笠木啓子、湯原恭子、理事／樋口愁枯、杉原昌子、特別会員／笹本公江、永江巌

協会の事業（合同公演）・１回／日田市民会館、36年４月29日。参加一ゆりかご、杉原昌子、佐藤朱音、日田近代、安部峰子、伊坂里美、わかあゆ。２回／竹田市公会堂、37年５月５日。参加一笠木啓子、日田近代、安部峰子、伊坂里美、わかあゆ、ゆりかご杉原昌子。３回／トキハ文化ホール、38年４月28日。参加一笠木啓子、伊坂里美、福沢佐藤、安部峰子、ゆりかご、杉原昌子、わかあゆ。４回／別府市国際観光会館、39年５月３日。参加一笹本公江、杉原昌子、ゆりかご、わかあゆ、笠木啓子、福沢佐藤。５回／中津市福沢会館、40年11月７日。参加一福沢佐藤、杉原昌子、わかあゆ、ゆりかご、笠木啓子。６回／大分文化会館、41年12月４日。参加一杉原昌子、わかあゆ、笹本公江、ゆりかご、笠木啓子、佐藤朱音。７回／日田市民会館、42年10月23日。参加一わかあゆ、杉原昌子、笠木啓子、佐藤朱音、ゆりかご。８回／竹田市公会堂、43年６月２日。参加一わかあゆ、佐藤朱音、笠木啓子ゆりかご、笹本公江、杉原昌子。９回／大分文化会館、44年10月４日。参加一佐藤朱音、笹本公江、笠木啓子、杉原昌子、ゆりかご。10回／大分文化会館、46年10月１日。参加一県芸術祭主催行事として、協会員合同で、バレエ「白鳥の湖」を公演することになった。これは全国でも数少ない成果であり、九州では初めての催しである。今回の「白鳥の湖」の公演こそ飛しようする大分県洋舞踊協会の現況そのものといえよう。

課題・こんごは若い会員に大きな期待をかけながら準会員の制度、後援会の設立、県外との交流、特に中央舞踊会とのつながりなどについて力を合わせながら一つ一つ問題を解決し、諸事業の実現を期したいと考えている。（県芸振会議監事・県洋舞協会長）

踊界は封建的、因習的な特殊な人たちの趣味と思われていますが、その観念を打破するためにはどうしたらよいか。会員一同頭を痛めている現状です。

近年民踊の動きには目を見張るものがありますが、民踊には民踊のリズムにのる楽しさがあります。日舞には能から進んできた本行モノの苦しさがあり、その苦しさを乗り越えて楽しさがあるものなのです。また新感覚で作られた新作モノには脱皮した楽しさもあります。

日舞では何といっても昔から伝はる古典モノを現在の人々にいかに理解してもらうかという面と、またそれを舞台の上に表わし、はやし（囃子）連中とのイキのつかみ合わせ、邦楽日舞による演時のメリハリによってお互いに一致協力する境地があるのです。この時、日舞は流派を越えて芸があり美しさがあるのだと考えています。

外国にはそれぞれ独自の伝統を生かした舞踊がある様に日本人には日本の舞踊が残るべきであると考えています。これは日舞家に与えられた使命と責任であると痛感いたします。今日のレジャーブームにあたって単なる暇つぶしや、一般の娯楽と違った高度な精神的健康的な芸として他の日本芸能と並び、日舞への理解を深めていただければ、県民の皆様の日常生活の中に意義のある豊かな人間性を生み育てていくことができるのではないかと考えております。（県芸振会議理事、県日舞連会長）

県洋舞踊界の一大エポック

県民バレエ「白鳥の湖」の全幕上演

笠　木　啓　子

第７回大分県芸術祭開会行事を大分県洋舞踊協会が始めて担当し、チャイコフスキーのグランドバレエ「白鳥の湖」を全幕上演することは、実に画期的な意義深い企てであるといえましょう。

この公演の実現にご尽力くださった大分県、大分県教育委員会、大分県芸術文化振興会議、大分合同新聞社ならびに関係者の方々に深く敬意を表しますと共に、私どもはご期待に添うべく懸命の努力を重ねる覚悟であります。

省りみますと、全国に先がけて大分県洋舞踊協会が結成されたのは10年前のことであります。その後、ブロック活動や合同公演などを通して毎年着実な歩みを続け、県洋舞踊の普及発展と地方文化の向上に尽くしてきましたが、今回の公演企画は、大分県洋舞踊界の一大エポックであるばかりでなく、その水準のいかんも問われるものであるといわねばなりません。しかもこの県民バレエが各界の注目を集め、すでに文化庁や音楽展望紙上などにも紹介されておりますこと、またこのような企画は九州はもちろん全国でもほとんど、その前例を見ない画期的なものである点などを思うとき、私どもは、いよいよその使命の重大さを痛感するものであります。

県民バレエ上演についての今日までの歩みの大要は次の通りであります。(1)昭和45年10月に「白鳥の湖」公演を決定した。(2)昭和46年４月にスタッフ並びにキャストの決定を見た。(a)総出演者約90名である。(b)主役は若手育成のために次の２名を起用した。オデットに別宮恵子、オディールは中津留美恵、(c)その他のキャストは県洋舞踊協会員全員ならびに県下の所属団体研究生が参加する。(d)男性舞踊陣は中央より第一線活躍の７名のご協力を依頼した。(e)演出振付は柏谷辰雄先生に依頼した。氏は舞踊手として中央に名をなし、日本バレー協会理事、桐朋学園大学講師、日本バレエ界の第一人者である。(f)演出助手は平野博也氏、装置は古林茂三郎氏、照明は柏木淳一氏にそれぞれ協力を依頼した。(3)「白鳥の湖」練習スケジュールは、(a)昭和46年４月１日～５日の５日間にわたって柏谷先生を招き本格的な振付を開始。(b)７月17日～18日の２日間、再び演出者を招き振付を終了した。(c)８月20～24日の５日間にわたり、演出者ほか男性舞踊家を招き、総合練習ならびに第一回リハーサルを行なう。(d)９月27日～30日の４日間にわたり演出者ならびに男性参加による最終仕上げの総合練習ならびにリハーサルを行なう(e)その他、毎月一回合同練習を行ない、毎週各研究所において各パートを練習している。

終わりに、県民バレエの課題として、次の諸点を大切にしながら今回の公演の成功を図ると共に将来の発展をを期したいと思います。

１　県民バレエの上演を機会に大分県洋舞踊協会のレベルアップに努めたい。２　県民バレエの上演を通して県芸振の連帯性を深め、あわせて県民文化の向上に努めたい。３　バレエが文学、美術、音楽、演劇などを内包する総合芸術である点から、今回の上演を契機に他の文化諸団体との交流を図りたい。４　県民バレエの上演を契機として、新人公演や創作活動などの芸術活動を一層活発にし、若手舞踊人の層を厚くしたい。５　今回の上演を機会に一般県民のバレエ芸術に対する理解を深めることに努めたい。最後に皆様のご支援を何とぞよろしくお願い申しあげます。（県洋舞協理事長）

バレエ

竹内門下の展開

佐　藤　朱　音

偉大なるエリアナ・パブロワ先生の教えを受けられた竹内永先生が、大分の地ではじめてバレエの種をまかれました。私もその恩恵を受けた一人ですが、現在大分でバレエ研究所を主宰する先生方は、この竹内永先生をもとに展開されて今日に至っている次第で、バレエ芸術が日本に紹介されて40年近くなることを思えば、大分でのその歴史は古いことになるわけです。

外国では、国立という暖かい保護の中で情熱的に研究が絶えず積み重ねられていますが、皆さまご存知のように日本はまだバレエ学校の一つすらありません。当然他の芸術に比較して総合芸術としてのバレエが正しく理解されていないわけで、残念に思うことが少なくありません。

日本では、特に地方ではバレエとダンスの区別があいまいに

花　柳

九州一の花柳王国

花柳有句秀（ゆくひで）

大分県では「日本舞踊を習っています」と言えば「花柳流ですか」と聞かれる位に名取数も数百人におよび、九州では一番の花柳王国であります。門下生の指導にあたる専門部の名取も相当数あり、広く県内の人々にとけて親しまれてきました。

そういうわけで九州地区での年二回の講習会も、別府に家元を招いて、古典、新作はもとより、後継者の指導に欠くことのできない試験モノも、家元と共に精進をしておりまして、各師匠のレベルも他県に比べ高く評価されております。

花柳流は家元寿輔、分家徳太郎、分家芳次郎の三家で一家をなしております。県内もその三系統が混っておりますが、お互に手をとり合い、折あらば他流の方々とも共演するなどして研さんしております。

日本舞踊の楽しみは、日々のおけいこ（稽古）はもちろんですが、何といいましても、各師匠が催す発表会であります。大分県の花柳のもつ力にもかかわらず、他県に比しどちらかと言えば発表会が少ない状態です。大分県という地方性が日舞の

使われています。バレエはオペラを歌劇というように、舞踊劇と解釈するもので、舞台芸術として創られ発展してきたものであり、音楽、演劇、美術、文学などを内包する総合芸術です。従って踊り、即ちダンスを指してバレエというのではなく、また日本で呼ばれている洋舞・芸術舞踊の類でもないのです。ダンス（踊り）はバレエにとって最も主要な要素であってもバレエ構成上の一部にしかすぎません。バレエのレッスンは現在世界各地で音楽の音譜が共通の理解のもとにうけいれられているように共通の基本運動があり、これをダンス・クラシックといいます。このダンス・クラシックを正しく理解してたゆまぬ精進を長期に続けることによりはじめて体の線を美しくでき、困難な技術も得られるわけです。こうした日常の肉体訓練が第一次的であることはもちろんのこと、バレエ芸術においては高度な感覚と人間性が要求されます。それらを得てはじめて光輝く魂が展開されていくわけです。クラシックバレエというと古くて時代遅れのように誤解されがちですが、ダンス・クラシックを基礎に置いたバレエは、新しいパの創造、民族舞踊との融合により無限に発展していくものだと思います。

このような説明を致しますと難しく受けとられるかもしれませんが、バレエは決して難しいものではなく、人々の生活の中に溶けこんでこそ、バレエとしての生命と価値が生まれると信じます。

〝皆さまに愛されるバレエを〟と願う私たちの努力が、今日の「白鳥の湖」合同公演に結びついたことでもありますが、十分とはいえないまでも、県芸振会議を通じて、他の芸術文化にたずさわる方々との知識や心の交流、そしてご支援を得ることができたからだと確信致しております。私たちは、今後とも中央と地方の交流を怠ることなく努力しなければなりませんが、それと同時に大分県民の誇れる芸術文化を大事に育て、また常に人々から愛されるバレエを創造し、人々の生活と密着した存在にまで高めていきたいと願い、それを実行することだと思います。

その昔、私が「バレリーナになりたい」と途方もない夢を神に祈ったように、現在それを願う幼い子どもたちがおとなになったとき――を考えますと……きょうの一日がたいへん貴重に思えるのです。　（県洋舞協常任理事）

舞踊は、からだ(体)で書く詩

湯　原　恭　子

笹本公江バレエ学園大分別府教室の専任教師として、ことしで8回目の発表会をこの7月に無事に迎えることができました最初の2、3回は、無我夢中であった私も回を重ねていくごとに、いろいろなことがわかってきました。また自分自身いろいろな作品を踊ることにより、一つの作品を踊りきるということのむずかしさ、また踊りきることで、自信が得られると言うことを学ぶことができました。

クラシック・バレエのレッスンそれは自分自身とのたたかいだと思います。バレエのレッスンを通じて、自分をきびしく鍛えることができると思います。

私が教えを受けている先生は、「舞踊はからだで書く詩である」ということ、それは心に詩を持って踊るということだといつもおっしゃっていますが私自身、回を重ねるごとにそのむずかしさをつくづく感じております。

ことし芸術祭の開会式行事として、バレエ「白鳥の湖」を公演することになりましたが系統の異なる研究所が、一つにまとまってバレエ「白鳥の湖」をやることは、素晴しいことだと思います。

バレエ「白鳥の湖」に出演することで今までなかなか各研究所ではできなかった。全四幕の作品に出演すること、それによってテクニックだけでなく、ストーリーの流れを勉強できるといったことは現在バレエをやっている方々はもちろんのこと、これから先バレエをやりたいと思っている方々には素晴しいことと思います。

協会員全員がバレエを通じていろいろな事を学び団結して一つの作品の公演に一生けん命努力いたしております。

これを機会に県バレエ熱が高まり、発展させる方向へ導くものと堅く信じております。　（県洋舞協常任理事）

モダンダンス

大分県を象徴する作品化へ

樋　口　愁　枯

大分県洋舞踊協会が、九州の各県に先がけて協会組織を作っ

会としての必要な条件を満たすには、今まで会場、衣裳、大道具、小道具などに多額の費用を要し、折角広くだれもが参加して舞台をふむ喜びや、またそれを見て楽しみ、師匠はまたそのためにも一段と意欲をや燃すといった面が挫折せざるを得ない今までございました。

日舞ではどうしても数少ない傾向にある男性舞踊家も優れた方々が互に競いあい、そして一本の柱となって若い人たちの指導にあたっております。また女性舞踊家もベテランの年配の方々から、新進気鋭の実力派、それに古い因習を破って新しい型を創り出そうとする戦後派若手の人々が、上京上阪はもとより他県での催しには欠かさず見学し、技術を磨いております。

九州と言えば大分県花柳といわれるだけにいかに花柳発展のため努力すべきか大きく変化しようとする大分県にあって、重大な問題であります。政治、スポーツ、文化が今や若手によってとって代られようとする新時代にあって、日舞の世界の悪い意味での因習が大分県にあってそれが花柳の責任であるかの様にとられない為にも、私ども花柳流の一同はいろいろ考えさせられるものがあります。

ちょうど来年は故二代目家元の三回忌追善の会が福岡で開かれますが、大分県からの代表が大いに気をはいて大分県花柳流のために尽力したいと思います。皆様のお力添えやご鞭撻をこの紙面をかりてお願いしたいと思います。（県日舞連副会長）

てから、すでに十数年を経た。ところが他県でも結成はされたものの二年とは続かず、有名無実となり協会としての事業は何等なされていないのが現状である。

県洋舞踊協会が牛歩ながら十数年の年輪を重ね、その灯を消さずに今日を迎えたもののその間、幾多の苦難の時もあった。

とにかく会員各自のきびしい舞踊芸術観の相違や対立はあるにしても、協力しあう基本的な姿勢態度が、今日の県民バレエ「白鳥」にまで成功させたものといえよう。

モダン、ダンスは、そもそも生い立ちからしてバレエ（クラシック）とは、その性格を全く異にしているが、一般大衆にはまだあまり厳密に区別されていないのではなかろうか。

現在県下には大分市に「ゆりかご舞踊研究所」日田市に「わかあゆバレエ研究所」竹田市に「杉原舞踊研究所」があり、新しく佐伯に「くるみ舞踊研究所」が開かれ四団体である。

研究所の多少が舞踊文化のバロメーターでもないが、人口比にしては大分県は少なすぎると思う。

大分県はなかなか洋舞が育ちにくい風土の様である。それでも、「ゆりかご」「わかあゆ」「杉原」の三研究所は終戦後いち早くモダンダンスの名乗りをあげたのである。

モダン・ダンスはバレエ（クラシック）の様に一定の型式と「パ」を必要としない。バレエの観賞は、あの高度に、とぎすまされた「パ」の技術の芸術性にあるが、モダン・ダンスはその一節一節から芸術性をうんぬんすることは難かしい。作品全体を通してこそ、その価値が決まる。したがって、練習の基礎も両者は全く異なる。モダンダンスは中央と直結しにくい。それというのも共通のテクニックをもたないからである。がその反面地方で育ちやすい条件をもっている。

大分県を象徴する自然も歴史や文化も人情もこれらを素材とするモダンダンスへの作品化はこんごもっともっと追求されなくてはならないだろう。県下に散在する研究所が合同のレッスンを持つことは大変むずかしいことであるが今回の「白鳥」がこんごの県洋舞協会の前途を暗示する試金石でもあろう。特に県下のモダンダンス界にとって明るい希望は、平瀬克美の門下生後藤智江と樋口愁枯の門下から高瀬多佳子の出現である。

共に戦後っ子。大学の舞踊専攻を終え中央に嘱望されながらも、郷土大分に根を下し創作活動に精魂を傾けていることは、こんごの県下のモダンダンス界に新風を吹きこむものと期待される。（県洋舞協理事）

消息

◦昭和46年度九州地区文化振興会議終わる

1　期日　昭和46年7月30日、31日

2　会場　長崎県立図書館、県立美術博物館、県立ユースホステル

3　主　催　文化庁、長崎県教育委員会

4　参加者　文化団体関係者、芸術関係者、文化施設関係者など文化財保護関係者、新聞放送関係者、各都道府県および各市町村文化行政担当者、教育機関関係者

5　テーマ　文化の普及

(1)芸術文化を地区住民に親しみやすくするにはどうしたらよいか

(2)若い世代の文化活動への参加を推進するためにどんな方法があるか

(3)開発に対処し文化財保護の実をあげるにはどうすればよいか

6　部会　美術部会、音楽部会、演劇部会、文芸部会、文化財部会

7　各県の出席者数　•印は発表県

部門	大分	福岡	佐賀	熊本	宮崎	鹿児島	長崎	計
美術	•2	7	1	3	1	•1	•41	54
音楽	•2	•7	0	3	•1	1	27	39
文芸	2	5	•3	•3	2	•2	38	53
演劇	2	•9	•2	2	•2	1	27	43
文化財	2	•10	3	•1	1	1	•28	44

※来年は大分県が当番県になる見込みである。

◦昭和46年度大分県文化年鑑編集方針決まる。

型B6判108P（70,000字）歴年とし、500部印刷、次の部門別順序に内容が盛られる。

①文芸　②美術　③音楽　④舞踊　⑤演劇　⑥生活芸術　⑦文化財　⑧地域総合文化の動き

期限は11月末、12月の活動見込みを含めて、本年度内におけるそれぞれの文化団体の活動に重点をおいたものとすることにした

◦九州オペラ協議会が発足した。

九州各県のオペラ団体が互いに連携してオペラの発展につとめようと9月23日湯布院町へ関係者が集まって発足をみた。

◦米田貞一会長電話を架設（[redacted]

若柳

県日舞の統合公演を

若柳吉正寿

若柳流は、（初代）若柳寿童・（第二世）若柳吉歳・（第三世）現宗家・若柳寿邦・（第四世）若柳吉歳となっておりますなお東京には家元後見役として若柳吉三郎という方が創作の仕事を受け持って柳橋派として重宝がられた時代がございました容姿の節操の美しい方で憶い出されて懐しがってくださる方もございます。

現在では若柳光妙・大阪在住の私の師匠の若柳喜千祐が柳橋派の流れを伝えてくれております。ほかに直派若柳流・正派若柳流・西家元若柳吉世・日本舞踊学校第二世若柳吉兵衛などとなって全国に分布された名取と共に当流の発展普及を計り現在に至っております。仕事は地味ですが、流儀は藤間流・花柳流に並んで伝統は古く九州においても若柳会の集いがございます

大分県下では大分市の若柳吉楽社中・若柳吉楽は県下の日本舞踊の草分けとして名を馳せた方で多勢の名取ご連中と共にチームワークよく活躍されておられます。

若柳吉一菊社中・若柳吉一菊は終戦直後の全てが乏しい時の舞台で拝見した「三ツ面子守」を忘れることができません。

宇佐市の若柳妃秀社中・昨年まで東京で勉強しておりましたが、宇佐に帰っておけいこ（稽古）に励んでおります。新人です

別府市の若柳吉美都寿社中・私の妹です。14歳の頃から京都で演劇と共に勉強しておりましたので、もともとは舞台人なので、ちょっと毛色が異っております。

若柳吉正寿社中・私は6歳の頃より扇子を握り、戦中、戦後の今日まで、踊り続けて来られたことを何よりも感謝致しております。

県下の若柳流はこの五社が主流となって、各名取とともにおけいこ（稽古）に励んでおります。

さて、大分県下の日本舞踊家は多数おられますがチャンスがあって皆で仕事ができましたら素晴らしいものになるといつも思っています。私は旅が好きで、仕事を兼ねて他県へ出かける機会が多いのですが、大分県下の舞踊家の評判が大変良ろしいんです。それを聞くたびに、嬉しくて誇り高く思うのです。中央にヒケを取らぬ実力者ばかりで驚く程のがんばりやさんばかりです。〝消失してはいけない日本舞踊を守りましょう〟古典を基礎とした創作・家庭舞踊・民族舞踊なども、日本舞踊にはすべてがふくまれております。古い人も若人も、皆で心を通わせ、つなぎ合った手で羽ばたきたいものです。一般の方に日本舞踊を理解してもらえるように、舞踊家がそれを探求して広めなければいけないのではないでしょうか。

（県日舞連理事）

藤間

日舞の原点に帰って

藤間茂登女

九州の藤間流では、北九州、福岡、長崎、熊本方面の地盤が強大です。大分地区は、特に僅少で、藤間流発展のため、何人かの方々が、地盤を作ってまいりましたが、種々の事情で、中央の方へ出向いて行かれた方が多く、私ども、現在藤間流会員は、少数ながら藤間流、また日舞発展のため、努力致しております。藤間流につき述べますと、勘右エ門派、勘十郎派に分かれて、家元勘右エ門は、歌舞伎俳優尾上松緑という仕事の中に先代勘右エ門(幸四郎)のあとを継ぎ、私ども門下生を、二年に一度の十日間九州地区で夏期講習を続け、九州での発展に尽力しております。宗家勘十郎は、ほとんど歌舞伎方面の振付師としてテレビなどにも出演、活躍されています。勘右エ門派としては、家元が松緑という歌舞伎俳優である為に、役者芸と、舞踊家芸との差異につい多く学ぶところであると同時に、家元自身も、役者の時は役者とし、舞踊家としては、「勘右エ門と藤の会」といった、若手男性舞踊家17名を自分自身と結びつけ、一つの会を研究会として活躍しているのには、門弟として頭の下がる思いです。われわれは、一つの会として発表する時間、藤間流らしい出し物として受け入れられ、かっさい(喝采)を拍しても、その内容を検討する時、古典をどこまで踏襲すべきか芝居様にするか、また藤の会の人々が創り出す若手のセンスを、どう取り入れるか、いつも悩んでおります。幸い、九州藤間会が生れ、昨年福岡にて、家元、藤の会、九州藤間会合流にて、発表会を催し、他県の方たちと、一舞台を踏んでまいりましたがまたたびたびの会合にては、皆同じ意見を持ち、若手派に属しては、できるだけ、中央と直結して新しいものを意図していますが、そうなりますと、第一の問題が、時間と経費であります中央への往復に要するそれらのものと、舞踊教授という仕事が360日、弟子の養成などに追われてなかなかむつかしく、それには、二年に十日間の家元自身直接の講習は意義深く、また各師匠や藤の会会員個人の九州でのリードは、大変貴重なものです。

以上の様な課題を考えます時に、舞踊という原点に立ち帰って疑問というのは藤間流としてでなく、日本舞踊全体にいえることなのです。つまり私どもの目的は、あくまで芸としての舞踊を追求する人を育てることなのか、いい変えれば、舞踊家を育てねば師匠の立場がないのか、それとも、日本舞踊を習うということを動機としてしつけ（躾）や礼儀作法、あるいは着物を美しく着、立ち居ふるまいをきれいにしたいというものなのか、出発点をどこまで大事にしそれを大多数への最大公約数としてゆかねばならないのか、そうした中での技量の上達と舞の心をどういった形で教えるべきかが私自身のこんごの課題となっております。

（県日舞連理事）

民　踊

参加団体25の県踊連

園田喜平

民謡は庶民の生活の中から生れた田歌、庭歌、山歌、船歌、業歌（わざ）、盆踊り歌、酒宴歌、道歌、祭り歌、童歌（わらべ）、恋歌などで、ほとんどが必ずからだ(体)を動かす動作があった。だから「民謡」から「踊り」が生まれることは必然であり、「民謡」ということばには「民踊」という意味が含まれている。

しかし盆踊り歌を除いては「民謡」の主体はあくまで「謡」であると思う。

昭和の初期ごろから芸能文化が盛んになるにつれて民謡を踊ることが多くなり「謡」と「踊」を区別する必要が生じて「民謡舞踊」ということばが生まれ、終戦後人間性解放は更に舞踊本能の解放とともに文化生活の向上によって謡うことよりも踊ることを中心にした「民踊」という未熟語がつくられた。

大分県にも終戦後「民謡を踊る団体」ができて活潑に活動してきたが、昭和37年1月県内に結成されている民踊団体18が集まり、「郷土民踊の健全な保存顕彰と芸術文化の向上を目ざして大分県民踊連盟が生まれた。10年前のことである。これによって今までなかった民踊の家元制度が生まれ、師範も続々と養成されて、民踊人口は急速に増加し、本流である民謡研究よりも舞踊を中心とした「民踊」が県下を席捲した。特に昭和41年の大分国体の天覧マスゲームに県内の民踊がとり入れられたことが更に拍車をかけた。県内の婦人会、婦人学級、公民館などが民踊教室をとりあげて、県民皆踊のムードが盛り上がった。その指導には県踊連の指導者が当たり、その振興に大いにつくした。

現在県踊連に参加する団体25に及びこれらが指導する県内の民踊教室などの数は有に百数十に達する。毎年一回研究の成果を発表する「民踊祭り」もことしは十回に及ぶ。

今後は民踊の原点に立ちかえって「踊り」と同時に「謡」も研究して先祖の心に迫りたいと思う。

（県芸振会議理事・県踊連副会長）

県民踊指導者会議の結成を

江藤豊南

レクリエーションや社会体育として日本民踊はだれにでも親しまれ全国的に盛大になってまいりましたが、本年度からは小学校で、来年度からは中学校でも好むと好まざるとにかかわらず体育と音楽の時間に実習せねばならなくなりました。これは当然のこととはいえ、たいへん愉快なことの一つであります

昭和7年日比谷公園で当時百万長者の住む丸の内の人々が、ご主人も奥様もお子様もお子さんもそして帝国ホテルなどに泊っている外人客までが数百人も参加し、揃いゆかたで踊っている姿を私は見て「日本という国は何という楽しい国だろう」と強く感じました。

早速振付者の花柳寿美師匠の宅を訪れ、内弟子の方から手ほどきを受け、その晩から二晩、踊り衣裳のゆかたその他1円30銭を奮発し踊りの輪に入って踊ったのが35歳、私の踊り初めでした。

馬鹿の一つ覚えというのがありますが、私もその一人で、帰るとすぐ同業者にも話し、手ほどきし、当時大分県で「丸の内音頭」が大流行しました。翌年には丸の内音頭の替歌「東京音頭」が生まれ、音頭時代を現出。そのもとは大分県からであったのです。

以来私は夢の実現に向って75歳の今日まで、約39年間も踊り続けておりますが、大分県には鶴崎踊りを初め数々の良い民踊がたくさんあります。民踊の師範も多勢いて、各地民踊の保存会や謡う民謡や三味太鼓など師もあることゆえ、これらの指導者が打って一丸となり民踊の研究と普及発展に民舞踊指導会議的なものを結成し、大分県の芸能文化の発展に寄与すべきだと思っております。そして県の芸術祭や文化祭に出場したい人はだれでも出場できる組織と実行力のある会の結成が急務だと存じます。

（県芸振会議理事・別府民踊百踊会代表）

児玉内科

院長　児玉嘉生

別府市北浜3丁目3番12号

TEL 別府 3—0777・自宅 3—5785

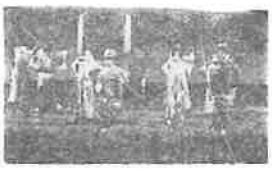
祝・第7回大分県芸術祭

大分県民踊大会

日時…10月12日(火)　午後1:30～4:00

会場…大分文化会館大ホール

出場…県下民踊グループ



主催

踊の…

別府民踊百踊会

謡の…

大分萬謡会

波紋

「白鳥の湖」公演の成功を祈る

竹内　永

帰郷して一番に足が向いたのは文化会館のあるおほり（塚）ばただった。

朝のひっそりとした静かなただずまいの中で白鳥は無心に泳いでいた。私は時の経つのも忘れてあかず眺めていたがいつしかそれはオーバーラップしてバレエの「白鳥の湖」を連想していた。

二十数年の間にどれだけの「白鳥の湖」を観たことだろう。日本のバレエ団はもとより来日した各国のバレエ団は競ってそのお国ぶりを発揮した「白鳥の湖」をご披露してくれた。ニューヨークシティ、ボリショイ、レニングラードマーゴットフォンテンのイギリス王室バレエ団、フランス、イタリーと枚挙にいとまのないほど同じチャイコフスキーの「白鳥の湖」であってもその解釈により演出振付けが異りそれぞれに違った味合いの感銘をあたえてくれた。

こんど県民バレエで「白鳥の湖」をとり上げると聞いたとき、「これは大変！」と正直にいって驚いた。あまりにもお手本があり過ぎること、合同公演であり、しかもカラーの異った研究所の場合それをまとめ上げることがいかにむつかしいことか、テクニックをなぞることはできても作品としての一貫性を保つ上にはいろいろの要素が必要であり、演出、振付も男性舞踊手も東京から招かなくてはならない現状であり経済的にも赤字を覚悟しなければならないであろう。いろいろのことを思い合わせて私はその責任の重みを自分のことの様にひしひしと感じた。

十月一日の公演に先立ってレニングラードバレエの大分公演を観た。本場そのままを再現するという宣伝にいくらかのきぐ（危惧）を持ちながらも東京での第一回公演の時の感激を想い出していた。私はまだ現役でテレビの仕事をしていたのでリハーサルからみせていただいた。本番の舞台の立派さはいうまでもないがその舞台（けいこ）稽古のきびしさに脱帽したソリストはもちろん、コールドバレエの手の上げた角度まで注意のムチは容赦なくとび幾度となく練習は繰り返された。

舞台をつく（創）るということは生やさしいものではない。一見豪華けんらんを彩るものであってもその限られた時間内に凝結されたもの、それは日々新たな精進の涙ぐましいまでの汗の結晶である

ところで地方公演であるがいろいろのハンディがありむつかしい問題が山積している。観客の側にも責任がないとはいえないだろうか。レニングラードの場合でも、第一幕と第二幕の幕間に演奏が続けられているのに客席のざわめきはどうであろう。突如としてアナウンスが入り、「二分の休憩ですから席をお立ちにならないでください」と、私はア然とした。主催者側の配慮か、バレエ団の要請か知る由もないがこれではぶちこわしである。せっかく優雅な幻想の世界にひき込まれつつあったのが平手打ちをくわされた様な白々しい味気なさをかみしめた。FMをききながら仕事をしていたらこんどの県民バレエの第一回総けいこのニュースが流れてきて「……東京から男性バレリーナーを招き……」と放送された。私はもう怒る気力も無くなってしまった。マスコミが間違いを平然と報道する無神経さましてや「バレエもオペラも同じ様なもんじゃないか」とおっしゃる新聞記者氏を前にして私はただ寂しくうつろな笑みを浮べるのみである。

終戦後、荒れ果てたこの地に一粒の種をまいて去った私には二十五年経ったいま、開花しようと懸命の努力を積み重ねているバレエ団の方々のご苦労が痛いほどよくわかる。心からの成功を県民の皆さんと共に祈りたい。

（舞踊家）

45年度
文化庁主催芸振会議報告書から

昭和45年度地方芸術文化振興会議報告書の中から「舞踊」についてどんなことが論議されたか、意見の要旨を列挙してみる

1．地方における音楽・舞踊活動の現状と問題点

◦舞踊などは昔からの習慣で裏方さんに対する謝礼が大きく、その額によって発表の順位に関係する場合がある。謝礼については地域毎に一定の額を定めたり、道具類の賃貸センター的なものを建設する等の方法を検討する必要がある。（北海道会場）

2．文化団体の役割と現状

◦総合的な組織をつくる場合、作曲と洋舞というような異なる分野間の横の連絡も必要ではないか。（宮城会場）

3．音楽・舞踊の各部門別の問題点

◦舞踊は音楽にくらべて軽視されており、文化会館を貸してもらえないこともある。舞踊を音楽・美術と同様独立した芸術の一分野として扱ってほしい。また学校教育にも取り入れてほしい。（北海道・佐賀会場）

◦バレエや舞踊はまだぜいたくなものだと感じている人が多い啓蒙活動が必要。（高知会場）

◦民俗芸能、民謡など地方独自のもので中央でまねのできないものの保存は地方の責任であり、各県に保存責任者を設けるなどの方法を講ずるようこの振興会議を機会に気運を盛り上げたい。（高知会場）

◦民俗芸能の保存、育成のための文化庁の援助を望む。

（富山・高知会場）

4．地方における音楽（舞踊）活動振興方策

◦著作使用料、入場税とも減・免税してほしい。舞踊のおさらい程度のものにも課税されているが、これでは活動が大いに阻害される（著作権についてはある程度はやむを得ないのではないかという意見もあるが）（佐賀・高知・新潟会場）

編集後記

編集係では一日も早く原稿をまとめて印刷し、関係者へ届けたいと考えているけれど、執筆者の協力がなければ発行できない。第8号は県芸術祭開会式までにギリギリの印刷である。

第9号は11月発行予定。<県立美術博物館建設促進特集号>である。